

金魚撩乱

岡本かの子

青空文庫

今日も復一はようやく変色し始めた仔魚を一匹二匹と皿に掬い上げ、熱心に拡大鏡で眺めていたが、今年もまた失敗か——今年もまた望み通りの金魚はついに出来そうもない。そう呟いて復一は皿と拡大鏡とを縁側に抛り出し、無表情のまま仰向けにどたりとねた。

縁から見るこの谷窪の新緑は今が盛りだった。木の葉ともいえない華やかさで、梢は新緑を基調とした紅茶系統からやや紫がかった若葉の五色の染め分けを振り捌いている。それが風に揺らぐと、反射で滑らかな崖の赤土の表面が金屏風のように閃く。五六丈も高い崖の傾斜のところどころに霧島つつじが咲いて

いる。

崖の根を固めている一帯の竹藪たけやぶの蔭かげから、じめじめした草くさむ叢らがあつて、晚咲おそぎきの桜さくらそう草くさや、早咲はやぎきの金蓮花きんれんかが、小さい流れの岸まで、まだらに咲き続けている。小流れは谷窪やわから湧わく自然の水で、復一のような金魚飼育商しゅうくしょうにとつては、第一に稼か業ぎようの抛よりどころにもなるものだった。その水を岐えだにひいて、七つ八つの金魚池があつた。池は葭簾よしずで覆おおつたのもあり、露ろしゆつ出したのもあつた。遅たましい水音を立てて、崖とは反対の道路の石いしが垣きの下を大溝おおどぶが流れている。これは市中の汚水おすいを集めて濁にごつている。

復一が六年前地方の水産試験所を去つて、この金魚屋の跡取りあとと

として再び育ての親達に迎^{むか}えられて来たときも、まだこの谷窪に晩春の花々が咲き残っていた頃^{ころ}だった。

復一は生れて地方の水産学校へ出る青年期までここに育ちながら、今^{いまさら}更のように、「東京は山の手にこんな桃^{とうせんき}仙境^{よう}があるのだった」と気がついた。そしてこの谷窪を占^しめる金魚屋の主人になるのを悦^{よろこ}んだ。だが、それから六年後の今、この柔^{やわら}かい景色や水音を聞いても、彼^{かれ}はかえって彼の頑^{かたくな}になったところを一層枯^こ燥^{そう}させる反対の働きを受けるようになった。彼は無表情の眼^めを挙げ、崖の上を見た。

芝生^{しばふ}の端^{はし}が垂^たれ下^{さが}つている崖の上の広^{ひろ}大な邸園^{ていえん}の一端^{いったん}に口マネスクの半円祠堂^{しどう}があつて、一本一本の円柱は六月の陽^ひを受け

て鮮あざやかに紫薔薇ばらいろ色の陰かげをくつきりつけ、その一本一本の間から高い蒼空あおぞらを透すかしていた。白雲はるが遙か下界のこの円柱けたを桁けたにして、ゆつたり空を渡わたるのが見えた。

今日も半円祠堂のまんなかの腰掛こしかけには崖邸の夫人真佐子まさこが豊かな身体からだつきを聳そびやかして、日光を胸で受止めていた。膝ひざの上には遠目にも何か編みかけらしい糸の乱れが乗っていて、それへ斜ななめにうつとりとした女の子が凭もたれかかっていた。それはおよそ復一の気持とは縁のない幸福そのものの図だった。真佐子はかなりの近視で、こちらの姿は眼に入らなからうが、こちらからはあまりに毎日見馴みなれて、復一にはことさらに心を刺戟しげきされる図でもなかつたが、嫉妬しつとか羨望せんぼうか未練か、とにかくこの図に何かの感情を寄せ

て、こころを搔き立たさなければ、心が動きも止りもしないような男に復一はなっていた。

「ああ今日もまたあの図を見なくってはならないのか。自分とは全く無関係に生き誇つて行く女。自分には運命的に思い切れない女——。」

復一はむつくり起き上つて、煙草に火をつけた。

その頃、崖邸のお嬢さんと呼ばれていた真佐子は、あまり目立たない少女だった。無口で俯向き勝で、癖にはよく片唇を噛んでいた。母親は早くからなくして父親育ての一人娘なので、はたがかえって淋しい娘に見るのかも知れない。当の真佐子は別

にじくじく一つ事を考えているらしくもなく、それでいて外界の刺戟に対して、極めて遅い^{おそ}反応を示した。復一の家へ小さいバケツを提げて一人で金魚を買いに来た帰りに、犬の子にでも逐^おいかけられるような場合には、あわてる割にはかのゆかない体の動作をして、だが、逃^にげ出すとなると必要以上の安全な距離^{きより}までも逃げて行つて、そこで落付いてから、また今更のように恐^{きようふ}怖の感情を眼の色に迸^{ほとばし}らした。その無技巧^{むぎこう}の丸い眼と、特殊^{とくしゆ}の動作とから、復一の養い親の宗十郎は、大事なお得意の令嬢だから大きな声ではいえないがと断つて、

「まるで、金魚の蘭^{らんちゆう} 鑄^{ちゆう}だ」

と笑つた。

漠然ばくぜんとした階級意識から崖邸の人間に反感を持つている崖下の金魚屋の一家は、復一が小学校の行きかえりなどに近所同志の子供仲間として真佐子を目の仇かたきに苛いじめるのを、あまり嗜たしなめもしなかつた。たまたま崖邸から女中が来て、苦情を申立てて行くと、その場はあやまって受容うけいれる様子を見せ、女中が帰ると親達は他所そこ事ことのように、復一に小言はおろか復一の方を振り返つても見なかつた。

それをよいことにして復一の変態的な苛め方はだんだん烈はげしくなつた。子供にしてはませた、女の貞てい操そうを非難するようないいがかりをつけて真佐子に絡からまつた。

「おまえは、今日体操の時間に、男の先生に脇わきの下から手を入れ

てもらつてお腰巻のずつたのを上へ上げてもらつたらう。男の先生にさ——けがらわしい奴だ^{やつ}」

「おまえは、今日鼻血を出した男の子に駆^かけてつて紙を二枚もやつたらう。あやしいぞ」

そして、しまいに必ず、「おまえは、もう、だめだ。お嫁^{よめ}に行けない女だ」

そう云^いわれる度に真佐子は、取り返しのつかない絶望^{おちい}に陥^{おち}つた、蒼ざめた顔をして、復一^{ふくいつ}をじつと見た。深く蒼味^{あざみ}がかつた真佐子の尻^{しりさ}下りの大きい眼に当惑^{とうわく}以外の敵意^{てきい}も反抗^{はんこう}も、少しも見えなかつた。涙^{なみだ}の出るまで真佐子は刺^さし込まれる言葉^{ことば}の棘^{とげ}尖^{さき}の苦痛^{くるしみ}を魂^{たましい}に浸^しみ込^こましているという瞳^{ひとみ}の据^すえ方^{かた}だつた。やがて真

佐子の顔の瘰癧けいれんが激はげしくなつて月の出のように真珠色しんじゆいろの涙が
 下したまぶた 瞼まぶた から湧いた。真佐子は袂たもとを顔へ当てて、くるりとうしろ
 を向く。歳としにしては大柄おおがらな背中が声もなく波打つた。復一は身
 体中に熱く籠こもっている少年期の性の不如意ふによいが一度に吸い散らされ
 た感じがした。代つて舌したつづみ 鼓つづみ うちたいほどの甘いあま 哀あい 愁しゆう が復
 一の胸を充みたした。復一はそれ以上の意志もないのに大人の真似まねを
 して、

「ちつと女らしくなれ。お転婆てんぼ！」
 と怒鳴どなった。

それでも、真佐子はよほど金魚が好きと見えて、復一にいじめ
 られることはじきにけろりと忘れたように金魚買ひには続けて来

た。両親のいる家へ真佐子が来たときは復一は真佐子をいじめなかつた。代りに素気なく横を向いて口^{くちぶえ}笛を吹いている。

ある夕方。春であつた。真佐子の方から手ぶらで珍らしく復一の家の外を散歩しに来ていた。復一は素早く見付けて、いつもの通り真佐子を苛めつけた。そして甘い哀愁に充たされながらいつもの通り、「ちつと女らしくなれ」を真佐子の背中に向つて吐きかけた。すると、真佐子は思いがけなく、くるりと向き直つて、再び復一と睨み合つた。少女の泣顔の中から狡るような笑顔が無花果の尖のように肉色に笑み破れた。

「女らしくなれってどうすればいいのよ」

復一が、おやと思うとたんに少女の袂の中から出た拳がぱつと

開いて、復一はたちまち桜の花びらの狼藉ろうぜきを満面に冠かぶった。少し飛び退すきつて、「こうすればいいの！」少女はきくきく笑いながら逃げ去った。

復一は急いで眼口を閉じたつもりだったが、牡丹桜ぼたんの花びらのうすら冷い幾片いくへんかは口の中へ入ってしまった。けつくと唾つばを絞しぼつて吐き出したが、最後の一ひらだけは上顎うわあごの奥おくに貼はりついて顎裏あごうらのぴよぴよする柔やわらかいところと一重になってしまつて、舌尖しじで扱しごいても指先さきを突き込んでも除かれなかつた。復一はあわてるほど、咽喉のどに貼はりついて死ぬのではないかと思つて、わあわあ泣き出しながら家の井戸端いどばたまで駆けて歸つた。そこでうがいをして、花片はやつと吐き出したが、しかし、どことも知れない手の届き

かねる心の中に貼りついた苦しい花片はいつまでも取り除くことは出来なくなつた。

そのあくる日から復一は真佐子に会うと一そう肩肘かたひじを張つて威容いようを示すが、内心は卑屈ひくつな氣持で充たされた。もう口は利けなかつた。真佐子はずっと大人振つてわざと丁寧ていねいに会釈えしやくした。そして金魚は女中にに買わせに来た。

真佐子は崖やまの上の邸やしきから、復一は谷窪の金魚の家からおのおの中等教育の学校へ通うようになった。二人はめいめい異つた友だちを持ち異つた興味ひに牽かれて、めつたに顔を合すこともなくなつた。だが珍らしく映画館の中などで会うと、復一は内心に敵意おきを押え切れぬほど真佐子は美しくなつていた。型の整つた切れ

目のしつかりした下しもぶく膨れの顔に、やや尻下りの大きい目が漆しつこ黒くに煙けむつていた。両唇の角をちよつと上へ反らせるとひとを焦じらすような唇が生き生きとついていた。胸から肩へ女になりかけの豊ほうれい麗な肉付きが盛り上り手足は引ひき締しまつてのびのびと伸のびていた。真佐子は淑しゆくじよ女らしく胸を反らしたまま軽く目礼した。復一はたじろいで思わず真佐子の正面を避さけて横を向いたが、注意は耳いっぱいに集められた。真佐子は同どうはん伴の友達に訊たずねられてるようだ。真佐子はそれに対して、「うちの下の金魚屋さんとこの人。とても学校はよくできるのよ、」と云った。その、「学校はよくできる」という調子に全く平たい説明だけの意味しか響ひびくものがないのを聞いて復一は恥ちじよく辱で顔を充じゆうけつ血けつさした。

世界大戦後、経済界の恐怖に捲込まれて真佐子の崖邸も、手痛い財政上の打撃を受けたという評判は崖下の復一の家まで伝わった。しかし邸を見上げると反対に洋館を増築したり、庭を造り直したりした。復一の家から買い上げて行く金魚の量も多くなった。金魚の餌を貰いに来た女中は、「職人の手間賃が廉くなったので普請は今のうちだと旦那様はおつしやるんだそうです」といった。崖端のロマネスクの半円祠堂型の休み場もついでにそのとき建った。

「金儲けの面白さがなくなるときには、せめて生活でも楽しまなけりや」

崖から下りて来て、珍らしく金魚池を見物していた小造りで瘦

せた色の黒い真佐子の父の鼎造ていぞうはそう云った。渋い市楽いちらくの着物ものの着流しきりやで袂たもとに胃腸いちょうの持薬もちやくをしじゅう入いれているといった五十男おとこだった。真佐子の母親ははであつた美しい恋妻こいづまを若い頃亡なくしてから別にささやかな妾しやうたく宅たくを持もつだけで、自宅しやには妻つまを持たなかつた。何か操持そうぢをもつという氣風きふうを自らたのしむ性分しやうぶんもあつた。復一ふくいちの家の縁えんに、立てかけて乾ほしてある金魚桶おけと並ならんで腰こしをか

けて鼎造ていぞうは復一ふくいちの育ての親おやの宗十郎むねじゅうらうと話を始めはじめた。

宗十郎むねじゅうらうの家業いへわざの金魚屋きんぎよやは古ふるくからあるこの谷窪やくぼの旧家ふるいゝへだった。

鼎造ていぞうの崖邸たけやしは真佐子まさはこの生うまれる前まへの年とし、崖たけの上うへの桐畑きりばたけを均ならして建たてたのだからやつと十五六年じふごくねんにしかならない。

新住者しんぢゆうだがこの界隈かいわいの事ことや金魚きんぎよのことまで驚おどろくほど鼎造ていぞうはよ

く知っていた。鼎造の祖父に当る人がやはり東京の山の手の窪地に住み金魚をひどく嗜好したので、鼎造の幼時の家の金魚飼育の記憶が、この谷窪の金魚商の崖上に家を構えた因縁から自然とよみがえった。殊に美しい恋妻を亡くした後の鼎造には何か瓢々とした気持ちが生れ、この生物にして無生物のような美しい生きもの金魚によけい興味を持ち出した。

「江戸時代には、金魚飼育というものは貧乏旗本の体のいい副業だったんだな。山の手では、この麻布の高台と赤坂高台の境にぽつりぽつりある窪地で、水の湧くようなところには大体飼っていたものです。お宅もその一つでしょう」

あるとき鼎造にこういわれると、専門家の宗十郎の方が覚束

なく相槌あいづちを打つたのだつた。

「多分、そうなのでしよう。何しろ三四代も続いているという家ですから」

宗十郎が煤すすけた天井裏てんじょうらを見上げながら覚束ない挨拶あいさつをするのに無理もないところもあつた。復一の育ての親とはいいながら、宗十郎夫婦はこの家の夫婦養子で、乳呑児ちのみごのまま復一を生ま遺のこして病死した当家の両親に代つて復一を育てながら家業を継つぐよう親類一同から指名された家来筋の若者男女だつたのだから。宗十郎夫婦はその前は萩江節おぎえぶしの流行はやらない師匠ししやうだつた。何しろ始めは生きものをいじるといふことが妙みょうに怖おそしくつて、と宗十郎は正直に白状した。

「復一こそ、この金魚屋の当主なのです。だから金魚屋をやるのが順当なのでしょうが、どういうことになりますか、今の若ものにはまた考えがありましたようから」

宗十郎は淡々^{たんたん}として、座敷^{ざしき}の隅^{すみ}で試験勉強している復一の方を見てそういった。

「いや、金魚はよろしい。ぜひやらせなさい。並^{なみ}の金魚はたいしたこともありませんまいが、改良してどしどし新種を作れば、いくらでも価格は飛躍^{ひやく}します。それに近頃では外国人がだいぶ需要して来ました。わが国では金魚飼育はもう立派な産業ですよ」

実業家という奴^ぬは抜け目なくいろいろなことを知ってるものだと、復一は驚ろいて振り返った。鼎造は次いでいった。「それに

しても、これからは万事科学を応用しなければ損です。失礼ですが復一さんを高等の学校へ入れるに、もしご不自由でもあつたら、学費は私が多少補助してあげましようか」

唐突とうとつな申出を平気でいう金持の顔を今度は宗十郎がびつくりして見た。すると鼎造はそのけはいを押えていった。

「いや、ざつくばらんに云うと、私の家には雌めすの金魚が一ぴきだけでしょう。だから、どうもよその雄おすを見ると、目について羨うらやましくて好意が持てるのです」

復一は人間を表現するのに金魚の雌雄しゆうに譬たとえるとは冗談じようだんの言葉にしても程があるものだと思つとした。しかし、こういう反抗の習慣はやめた方が、真佐子に親しむ途みちがつくと考えないでも

なかつた。真佐子に投げられて上顎の奥に貼りついた桜の花びらの切ないなつかしい思い出で——復一はしきりに舌のさきで上顎の奥を扱いた。

「お子さまにお嬢さまお一人では、ご心配でございますね」

茶を出しながら宗十郎の妻がいうと、鼎造は多少意地張った口調で、

「その代り出来のよい雄をどこからでも選んで婿むこに取れますよ。自分のだつたらボンクラでも跡目を動かすわけにはゆかない」

結局、復一は鼎造の申出通り、金魚の飼養法を学ぶため上の専門学校へ行くことになり学資の補助も受けることになった。真佐子は何にも知らない顔をしていた。しかし、復一が気がついてみ

ると、もうこのとき、真佐子の周囲には、鼎造のいわゆるよその雄で鼎造から好意を受けている青年が三人は確たしかにいて、金釦ボタンの制服で出入りするものが、復一の眼の邪魔じやまになった。復一の観察するところによると、真佐子は美事みごとな一視同仁いっしどうじんの態度で三人の青年に交際していた。鼎造が元来苦勞人で、給費のことなど権利と思わず、青年を単に話相手として取扱とりあつかうのと、友田、針谷、横地というその三人の青年は、共通に卑屈な性質が無いところを第一条件として選ばれたとでもいうように、共通な平気さがあつて、学費を仰ぐ恩家のお嬢さんをも、テニスのラケットで無雜作たに叩いたり、真佐子、真佐子と年少の女並に呼び付けていた。一びきの雌に対する三びきの雄の候補者であることを自他の意識から完

全にカムフラージュしていた。それが真佐子にとって一層、男たちを一視同仁に待遇するのたいぐうに都合がよかつたのかも知れない。

崖邸の若い男女がそういう滑らかで快濶かいかつな交際社会を展開しているのを見るにつけ、復一は自分の性質を顧みて、遺憾いかんとは重々知りつつ、どうしても逆なコースへ向つてしまふのだつた。誰だれがあんな自我の無い手合いと一しよになるものか、自分にはあんな中途半端ちゆうはんぱな交際振りは出来ない。征服せいふくか被征服ひひくかだ。しかし、この頃自分の感じている真佐子の女性美はだんだん超越ちやうえつした盛り上り方をして来て、恋愛れんあいとか愛とか愛とかいうものの相手としては自分のような何でも対蹠たいしよてき的に角突き合わなければ氣の済まない性格の青年は、その前へ出ただけで脱力だつりよくさせられてし

まうような女になりかかつて来ていると思われた。復一はこの頃
 から早熟の青年らしく人生問題について、あれやこれや獵奇的
りようきてき
 の思索しきくに頭の片端を入れかけた。結局、崖の上へは一步も登らず
 に、真佐子がどうなつて来るか、自分が最も得意とするところの
 強情を張つて対抗してみようと決心した。到底とうてい自分のような光
うたく
にお
 沢ざいも匂においもない力だけの人間が、崖の上の連中に入つたら不調
ざんばい
 和な惨敗ざんばいときまつている。わけて真佐子のような天女型の女性
とうひつ
 とは等匹とうひつできまい。交際つきあえば悪びれた幫間ほうかんになるか、威丈いたけだ
か
きよせい
 高な虚勢きよせいを張るか、どつちか二つにきまつている。瘠我慢やせがまん
ひが
 をしても僻みひがを立てて行くところに自分の本質はあるのだ。要す
ふつう
 るに普通ふつうの行き方では真佐子をはじめから適かなわらない自分の相手な

のだ。たった一つの道は意地悪く拗ねることによつて、ひよつとしたら、今でもあの娘はまだ自分に牽かれるかも知れない。復一は変態的に真佐子をいじめつけた幼年時代の哀しい甘い追憶にばかりだんだん自分をかたよらせて行つた。

そのうち復一は東京の中学を卒え、家畜魚類の研究に力を注いでいる関西のある湖の岸の水産所へ研究生に入ることになった。

いよいよ一週間の後には出発するという九月のある宵、真佐子は懐中電燈を照らしながら崖の道を下りて、復一に父の鼎造から預つた旅費と真佐子自身の餞別を届けに来た。宗十郎夫妻に礼をいわれた後、真佐子は復一にいった。

「どう、お訣れに、銀座へでも行つてお茶を飲みませんか？」

真佐子が何気なく帯の上前の合せ目を直しながらそういうと、あれほど頑固がんこをとおすつもりの復一の拗ね方はたちまち性が抜けてしまうのだった。けれども復一は必死になつていった。

「銀座なんてざわついた処ところより僕は榎木町ほく えのきの通りぐらいなら行つてもいいんです」

復一の真佐子に対する言葉つかいはもう三四年以前から變つていた。友達としては堅かたくるしい、ほんの少し身分ちがの違ちがう男女間の言葉遣づかいに復一は不知不識しらずしらず自分を馴ならしていた。

「妙なところを散歩に註ちゅうもん文するのね。それではいいわ。榎木町で」

赤坂山王下さんのうしたの寛濶かんかつな賑にぎやかさでもなく、六本木葵町間あおいの引

締つた賑やかさでもなく、この両大通りを斜に縫つて、たいして大きい間口の店もないが、小ぢんまりと落付いた賑やかさの夜街の筋が通つていた。店先には商品が充実して、その上種類の変化も多かつた。道路の闇を程よく残して初秋らしい店の灯の光が撒き水の上にきらきらと煌めいたり流れたりしていた。果物の屋の溝板の上には抛り出した砲丸のように残り西瓜が青黒く積まれ、飾窓の中には出初めの梨や葡萄が得意の席を占めてゐる。肥つた女の子が床几で絵本を見ていた。騒がしくも寂しくもない小ぢんまりした道筋であつた。

真佐子と復一は円タクに脅かされることの少い町の真中を臆するところもなく悠々と肩を並べて歩いて行つた。復一が真佐子

とこんなそばに傍へ寄り合うのは六七年振りだった。初めのうちはこ
 んなにも大人に育つて女性の漿しようえき液あふの溢れるような女になつて、
 ともすれば身体よじの縊り方一つにも復一は性の独立感を翻ほんろう弄ろうされ
 そうな怖おそれを感じて皮膚ひふの感覚をかたく冑よろつて用心してかからね
 ばならなかつた。そのうち復一の内部から融とかすものがあつて、
 おやと思つたときはいつか復一は自分から皮膚感覚の囲みを解い
 ていて、真佐子の雰ふん囲いき気の圈けん内ないへ漂ただよい寄るのを樂しむようにな
 っていた。すると店の灯も、町の人通りも香こう水すいの湯氣を通して
 見るように媚なまめかしく朦もうろう朧とうとなつて、いよいよ自意識を頼たよりな
 くして行つた。

だが、復一にはまだ何か焦いらいら々と抵てい抗こうするものが心底に残つ

ていて、それが彼を二三歩真佐子から自分を歩き遅らせた。復一は真佐子と自分を出来るだけ客観的に眺める積りでいた。彼の眼には真佐子のやや、ぬきえもんに着た襟えりのかまちになっていいる部分にアイルランドあざの愛 蘭 麻のレースの下重ねが清楚せいそに覗のぞかれ、それからテラコッタ型の完全な円筒形えんとうの頸くびのぼんの窪くぼへ移る間に、むつくりと搗つき立ての餅もちのような和なごみを帯びた一いっ堆つの肉の美しい小山が見えた。

「この女は肉体上の女性の魅力みりよくを剩あますところなく備えてしまつた」

ああ、と復一は幽かすかな嘆たんせい声こゑをもらした。彼は真佐子よりずっと背が高かった。彼は真佐子を執拗しつように観察する自分が卑いやしまれ、

そして何か及ばぬものに対する悲しみをまぎらすために首を脇へ向けて、横町の突当りに影を凝す山王の森に視線を逃がした。

「復一さんは、どうしても金魚屋さんになるつもり」

真佐子は隣に復一がいるつもりで、何気なく、相手のいない側を向いて訊ねた。ひと足遅れていた復一は急いでこの位置へ進み出て並んだ。

「もう少し気の利いたものになりたいんですが、事情が許しそうもないのです」

「張合のないことおっしゃるのね。あたしがあなたなら嬉んで金魚屋さんになりますわ」

真佐子は漂渺とした、それが彼女の最も真面目なときの

表情でもある顔付をして復一を見た。

「生意気なこと云うようだけれど、人間に一ばん自由に美しい生きものが造れるのは金魚じゃなくて」

復一は不思議な感じがした。今までこの女に精神的のものとして感じられたものは、ただ大お様で贅ぜ沢いたな家庭に育った品格的のものだけだと思っていたのに、この娘から人生の価値に関係して批評めく精神的の言葉を聞くのである。ほんの散歩の今の当座の思い付きであるのか、それとも、いくらか考えでもした末の言葉か。

「そりや、そうに違いありませんけれど、やっぱりたかが金魚ですからね」

すると真佐子は漂渺とした顔付きの中で特に煙る瞳を黒く強調させて云った。

「あなたは金魚屋さんの息子むすこさんの癖に、ほんとに金魚の値打ちをご承知ないのでよ。金魚のために人間が生き死にした例がいくつもあるのよ」

真佐子は父から聴いた話だといって話し出した。

その話は、金魚屋に育った復一の方が、おぼろげに話す真佐子よりむしろ詳くわしく知っていたのであるが、真佐子から云われてみて、かえって価値的に復一の認識はんぷくに反はん覆ぶくされるのであった。事実はずっとこうなのである。

明治二十七八年の日清戦役後の前後から日本の金魚の観賞熱は

とみに旺盛おうせいとなった。専門家の側では、この機に乗じて金魚商の組合を設けたり、アメリカへ輸出を試みたりした。進歩的の金魚商は特に異種の交媒こうばいによる珍奇ちんきな新魚を得て観賞需要の拡張を図ろうとした。都下砂村の有名な金魚飼育商の秋山が蘭鑄からその雄々おおしい頭の肉瘤にくりゆうを採り、琉金りゆうきんのような体容の円美と房々ふさふさとした尾おを採って、頭尾二つとも完美的な新種を得ようとする、ほとんど奇蹟きせきにも等しい努力を始めて陶冶とうやに陶冶を重ね、八ヶ年の努力の後、ようやく目的のものを得られたという。あの名魚「秋錦しゅうきん」の誕生たんじょうは着手の渾沌こんとんとした初期の時代に属していた。

素人しろうとの熱心な飼育家も多く輩出はいしゅつした。育てた美魚を競つ

て品評会や、美魚のばんづけ番附を作ったりした。

その設備の費用や、交際や、仲に立ってこうけい狡計を弄する金魚ブ

ローカーなどもあつて、金魚のため——わずか飼魚の金魚のために家産を破り、流難こうぼう荒亡するみじめな愛魚家が少からずあつた。

この愛魚家は当時において、ほとんどきようそう狂想にも等しい、金魚の総あゆる種類あの長所あを選びあつ蒐めた理想の新魚を創成しようと、大掛りな設備で取りかかつた。

和金の清せいしや洒な顔付きと背肉の盛り上りを持ち胸と腹は琉金のほうじよう豊饒の感じを保っている。

ひれ鰭は神女の裳ものようにどう胴を包んでたゆたい、体色は塗ぬり立てのあざやような鮮かなごさい五彩をよそお粧い、別わけて必要なのはスペイン西班牙のまいこ舞妓のボエ

ールのような斑黒点はんこくてんがコケテイツシユな間隔かんかくで振り撒かれなければならなかつた。

超現実ゆめに美しく魅惑みわくてき的な金魚は、G氏が頭の中に描えがくところの夢の魚ではなかつた。交媒を重ねるにつれ、だんだん現実性を備えて来た。しかし、そのうちG氏の頭の方が早くも夢幻むげん化して行つた。彼は財力も尽つきるといっしよに白痴はくちのようになって行衛ゆくえ知れずになつた。「赫耶かくやひめ姫！」G氏は創造する金魚につけるはずのこの名を呼びながら、乞食こじきのような服装ふくそうをして蒼惶そうこうとして去つた。半創成の畸形きけいな金魚と逸話いつわだけが飼育家仲間に遺つた。「Gさんという人がもし気違きちがひいみたいにならないで、しっかりと頭でどこまでも科学的な研究でそういう理想の金魚をつくり出

したのならまるで英雄えいゆうのように勇氣のある偉いえら仕事をした方だと想おもうわ」

そして絵だの彫ちようこく刻だの建築だのと違つて、とにかく、生きものという生命を材料にして、恍惚こうこつとした美麗びれいな創造を水の中へ生み出そうとする事はいかに素晴すばらしい芸術的な神技であろう、と真佐子は口を極めて復一のこれから向おうとする進路について推賞するのであった。真佐子は、靈南坂れいなんざかまで来て、そのアメリカンベーカーリーへ入るまで、復一を勇氣付けるように語り続けた。

楼ろうじよう上じようで蛾がが一二匹シャンデリヤの澄すんだ灯のまわりを幽かすかな淋しい悩みのような羽音をたてて飛びまわった。その真下のテ

「ブルで二人は静かに茶を飲みながら、復一は反対に訊いた。

「僕のことですが。真佐子さんはどうなさるんですか。あなた自身のことについてどう考えているんです。あなたはもう学校も済んだし、そんなに美しくなつて……」

復一はさすがに云い淀よどんだ。すると真佐子は漂渺とした白い顔に少し羞はじらいをふくんで、両袖りょうそでを掻き合しながら云つた。

「あたしですの。あたしは多少美しい娘かも知れないけれども、平へいぼん凡ぼんな女よ。いずれ二三年のうちに普通に結けっこん婚して、順当に母になつて行くんでしよう」

「……結婚つてそんな無雑作なもんじやないでしょう」

「でも世界中を調べるわけに行かないし、考え通りの結婚なんて

やたらにそこらに在るもんじやないでしょう。思うままにはならない。どうせ人間は不自由ですわね」

それは一応絶望の人の言葉には聞えたが、その響ひびきには人生の平凡を寂うらしがる憾うらみもなければ、絶望から弾はね上あつて将来の未知を既知きちの頁ページに繰くつて行こうとする好奇こうきしん、心も情熱も持つていなかっ

た。「そんな人生に消極的な気持ちのあなたが僕のような煮にえ切きらない青年に、英雄的な勇氣を煽あおり立てるなんてあなたにそんな資格はありませんね」

復一は何にとも知れない怒いかりを覚おぼえた。すると真佐子は無口の唇を半分嚙かんだ子供のときの癖を珍めづらしくしてから、

「あたしはそうだけれども、あなたに向うと、なんだかそんなことを勧めたくなるのよ。あたしのせいではなくて、多分、あなたがどこかに伏せている気持ち——何だか不満のような気持ちがあたしにひびいて来るんじゃないやなくて、そしてあたしに云わせるんじゃないやなくて」

しばらく沈黙が続いた。復一は黙って真佐子に対つてみると、真佐子の人生に無計算な美が絶え間なく空間へただ徒らに燃え費されて行くように感じられた。愛惜の気持ちが復一の胸に沁み渡ると、散りかかって来る花びらをせき留めるような余儀ない焦立ちと労りで真佐子をかたく抱きしめたい心がむらむらと湧き上るのだった……。。

復一は吐息といきをした。そして

「静かな夜だな」

というより仕方がなかった。

復一が研究生として入った水産試験所は関西の大きな湖の岸にあつた。〇という県庁所在地の市は夕飯後の適宜てきぎな散歩距離きよりだつた。

試験所前の曲まげものや折箱おりばこを拵こしらえる手工業かぎようを稼業とする家の離れはなの小座敷ざしきを借りて寝起きをして、昼は試験所に通い、夕飯後は市中へ行つて、ビールを飲んだり、映画を見たりする単純な技術家氣質の学生生活が始まつた。研究生は上級生まで集めて十人

ほどでかなり親密だった。淡水魚たんすいぎよの、養殖ようしよくとか漁獲ぎよかくとか製品保存とかいう、専門中せまでも狭い専門に係る研究なので、来ている研究生たちは、大概たいがい就職きまの極きまっている水産物関係の官衙かんがや会社やまたは協会とかの委託いたくせい生で、いわば人生も生活も技術家としてコースが定められた人たちなので、朴々ぼくぼくとしていずれも胆汁たんじゆうしつ質の青年に見えた。地方の人が多かつた。それに較くらべられるためか、復一は際しゅんびんだった。駿敏しゅんびんで、目端めはしの利く青年に見えた。専修科目が家畜魚類の金魚なのと、そういう都会人的の感覚のよさを間違つて取つて、同学生たちは復一を芸術家だとか、詩人だとか、天才だとか云つて別格にあしらつた。復一自身に取つては自分に一ばん欠乏けいべつもし、また軽蔑けいべつもしている、そういうタ

イトルを得たことに、妙なちぐはぐな気持がした。

担任の主任教授は、復一を調法にして世間的関係の交こうしやう渉しやうに

は多く彼を差向けた。彼は幾つかのこの湖畔こはんの水産すいさんに関係ある家
に試験所の用事で出入りをしているうち、その家々で二三人の年
頃の娘とも知合いになった。都会の空気に憧憬あこがれる彼女等はスマ
ートな都会青年の代表のように復一に魅着の眼を向けた。それは
極めて実感的な刺戟を彼に与えた。同じような意味で彼は市中の
酒場の女たちからも普通の客以上の待たいぐう遇ぐうを受けた。

しかし、東京を離れて来て、復一が一ばん心で見直したとい
より、より以上の絆きずなを感じて驚いたのは、真佐子であつた。

真佐子の無性格——彼女はただ美しい胡蝶こちやうのように咲いて行

く取り止めもない女、み充ち溢れる魅力はある、しかし、それは単に生理的のものでしかあり得ない。いうことは多少気の利いたこともいうが、機械人間が物言うように発声の構造が云っているのだ。でなければ何とも知れない底気味悪い遠方のものが云っているのだ。そうとしか取れない。多少のいやらしさ、なまぐさ腥さもあるべきはずの女としての魂、それが詰め込まれている女の一人として彼女は全面的に現れて来ない。情じょう痴うちを生れながらに取り落して来た女なのだ。真佐子をそうとばかり思っていたせいか復一は東京を離れるとき、かえってさばさばした気がした。マネキン人形さんにはお訣れするのだ。非人間的な、あ的美魔びまにはもうおさらばだ。さらば！

と思つたのは、移転や新入学の物珍らしさに紛まぎれていた一二ヶ月ほどだけだった。湖畔の学生生活が空気のように身について来ると、習慣的な朝夕の起おき臥ふしの間に、しんしんとして、寂しいもの、惜おしまれるもの、痛むものが心臓を掴つかみ絞ひるのであつた。雌花めばなだけでついに雄蕊おしべにめぐり合うことなく滅ほろびて行く植物の種類の最後の一花、そんなふうにも真佐子が感ぜられるし、何か大きな力に操さられながら、その傀かい儡らいであることを知らないで無心で動ういている童女ののようにも真佐子が感ぜられるし、真佐子を考考えるとき、哀あわれさそのものになつて、男性としての彼は、じつとしていられない気がした。そして、いかなる術も彼女の中身に現実の人間を詰めかえる術は見出しにくいと思うほど、復一ふの人生

一 いっばん般よむかん に対する考えも絶望的なものになって来て、その青寒い虚き

無感よむかんは彼の熱苦るしい青年の野心の性体を寂しく快く染めて行

き、静かな吐息を肺量の底を傾かたむけて吐き出さすのだった。だが、

復一はこの神秘性を帯びた恋愛にだんだんプライドを持って来た。

それに関係があるのかないのか判わからないが、復一の金魚に対する考えが全然変って行き、ねろりとして、人も無げに、無限をばくばく食べて、ふんわり見えて、どこへでも生の重点を都合よくすいすい置き換え、真の意味の逞ましさを知らん顔をして働かして行く、非現実的でありながら「生命」そのものである姿をつくづく金魚に見るようになった。復一は「はてな」と思った。彼は子供のときから青年期まで金魚屋に育って、金魚は朝、昼、晩、

見飽みあきるほど見たのだが、蛍ほたるの屑くずほどにも思わなかった。小さい
かつぱ虫むしに鈍にぶくも腹はらに穴あなを開けられて、青みどろの水の中を勝手に
引っぱられて行く、脆もろいだらしのない赤い小布こぶの散らばったも
のを金魚だと思っていた。七つ八つの小池に、ほとんどうっちゃ
り飼かいにされながら、毎年、池の面が散り紅葉で盛り上るように
殖ふえて、種の系統を努めながら、剩のこった魚でたいして生活力があ
りそうもない復一ふいつ親子三人をとにかく養やしなつて来た駄金魚だきんぎょを、何か
実用じつよう的な木こつ葉はか何かのように思っていた。

もつとも復一の養父は中年ものだけに、あまり上等の金魚は飼
育出来なかった。せいぜい五六年の緋鮒ひふなぐらいが高価品で、全く
の駄金魚屋だった。この試験所へ来て復一は見本に飼われてある

美術品の金魚の種類を大体知った。蘭鑄、オランダししがしら和蘭獅子頭はもちろんとして、出目蘭鑄、ちようてんがん頂点眼、秋錦、しゆぶんきん朱文錦、全蘭子、キヤリコ、東錦、——それに十八世紀、ワシントン水産局の池で発生してむこうの学者が苦心の結果、型を固定させたというゆいしよ由緒付の米国生れの金魚、コメツト・ゴールドフィッシュさえ備えられてあつた。この魚は金魚よりむしろとうぎよ闘魚かっぱつに似て活潑かつぱつだつた。これ等の豊富らな標本魚は、みな復一の保管の下に置かれ、毎日昼前に復一がやる餌を待った。

水を更かえてやると気持よさそうに、日を透けて着色する長い虹にじのような脱糞だつぶんをした。

研究が進んで来ると復一は、試験所の研究室と曲もの細工屋の

離はなれの住家とを黙々として往復する以外は、だんだん引籠ひきこもり勝ちになつた。復一が引籠り勝ちになると湖畔の娘からはかえつて誘さそい出しが激しくなつた。

娘は半里ほど湖上を渡つて行く、城のある出崎の蔭うきあみに浮網うきあみがしじゆう干してある白壁しろかべの蔵を据えた魚漁家の娘だつた。

この大きな魚漁家の娘の秀江は、疝かんだか高たかでトリツクの煩わづらわしい一面と、関西式の真綿まわたのようにねばる女性の強みを持つていた。

試験所から依頼いらいされているのだが、湖から珍らしい魚が漁とれても、受取りの係である復一は秀江の家へ近頃はちつとも来ないのである。そして代りの学生が来る。秀江はどうせ復一を、末始すえしじ終ゆうまで素直すなおな愛人とは思つていなかつた。いよいよ男の我儘わがまま

が始まったか、それとも、何か他の事情かと判断を繰り返しながら、いろいろ探りを入れるのであった。幹事である兄に勧めて青年漁業講習会の講師に復一を指名して出崎の村へ二三日ばかり呼び寄せようとしてみたり、兄の子を唆かして、あどけない葉書を復一に送らせ、その返事振りから間接に復一の心境を探ろうとしたりした。彼女自身手紙を出したり、電話をかけても、復一から実のある返事が得られそうな期待は薄くなつた。彼女は兄夫婦の家の家政婦の役を引受けて、相当に切廻きりまわしていた。彼女と復一との噂うわさは湖畔に事実以上に拡ひろがっているので、試験所の界限へ寄りつけなかつた。

「東京を出てからもう二年目の秋だな」

復一は、鏡のように凧ないだ夕暮前の湖面を見渡しながら、モーターボートの纜ともづなを解いた。対岸の平沙へいさの上にM山が突兀とっこつとして富士型に聳そびえ、見詰めても、もう眼が痛くならない光の落ちついた夕陽が、銅の襖ふすまの引手のようにくつきりと重々しくかかっている。エンジンを入れてボートを湖面に滑すべり出さすと、鵲せきれい鴿の尾のように船あとを長くひき、ピストンの鼓動こどうは気のひけるほど山水の平静を破った。

復一の船が海水浴場のある対岸の平沙の鼻に近づくと湖は三叉さんさの方向に展開しているのが眺め渡された。左手は一番広くて袋ふくろなりに水は奥へ行くほど薄れた懐ふところを拈ひげ、微紅びこうの夕靄ゆうもやは一層水面

の面積を広く見せた。右手は、蘆あしの洲すの上に漁家の見える台地で、湖の他方の岐入と、湖水の唯一ゆいいつの吐け口のS川の根元とを分っている。S川には汽車の鉄橋と、人馬の渡る木造の橋とが重なり合つて眺められ、汽車が煙を吐きながら鉄橋を通ると、すべての景色が玩具がんぐじ染みて見えた。

復一は、平沙の鼻なびさの渚なぎさ近くにボートを進ませたが、そこは夕方にしては珍らしく風当りが激しくて海のように菱波ひしなみが立ち、はすの魚がしきりに飛んだ。風を除よけて、湖の岐入の方へ流れ入ると、出崎の城の天主閣てんしゆかくが松林まつばやしの蔭から覗き出した。秀江の村の網手の影が眼界うかがに浮び上つて来たのである。結局、いつもの通り、湖の岐入とS川との境の台地下へボートを引ひきもど戻し、蘆洲

の外の馴染なじみの場所に舶とめて、復一は湖の夕暮こぼれに孤独こどくを楽しもうとした。

復一はボートの中へ仰あおむ向けに臥ねそべった。空の肌質きじはいつの間にか夕日の余ほとぼり燼さを冷さまして磨みがいた銅鉄色さに冴さえかかっていた。表面けずに削り出しのような軽く捲まく紅いろの薄雲さが一面に散ちついで、空の肌質きじがすっかり刀色さに冴さえかえる時分うんもを合図あのようにして、それ等の雲うんもはかえつて雲母色うんもに冴さえかえつて来た。復一はふと首もたを擡もたげてみると、まん丸の月が〇市の上に出でていた。それに對して〇市の町の灯の列はどす赤く、その腰びようぶを屏風びようぶのように背そ後の南へ拡がるじぐざぐの屏嶺へいれいは墨色すみいろへ幼稚ようちな皺しわを陰立したしている。

対岸の渚の浪の音が静まって、ぴちよりぴよんという、水中から水の盛り上る音が復一の耳になつかしく聞えた。湖水のここは、淵の水底からどういふ加減か清水が湧き出し、水が水を水面へ擡げる渦が休みなく捲き上り八方へ散っている。湖水中での良質の水が汲まれるというのでここを「もくもく」と云い、京洛の茶人はわざわざ自動車で水を汲ませに寄越す。情死するため投身した男女があつたが、どうしても浮き上つて死ねなかつたという。いろいろな特色から有名な場所になっている。

この周囲の泥沙は柳の多いところで、復一は金魚に卵を産みつけさせる柳のひげ根を摂りに来てここを発見した。

「生命感は金魚に、恋のあわれは真佐子に、肉体の馴染みは秀江

に。よくもまあ、おれの存在は器用に分裂したものだ」

もくもくの水の湧き上る渦の音を聞いて復一の孤独が一層批判の焦^{しやうてん}点を絞り縮めて来た。

復一は半醒^{はんせい}半睡^{はんすい}の朦朧^{もうろう}状態で、仰向けに寝ていた。朦朧

とした写真の乾板^{かんばん}色の意識の板面に、真佐子の白い顔が大きく

煙る眼だけをつけてぼっかり現れたり、金魚の鰭^{ひれ}だけが嬌^{きよう}艶^{えん}

な黒斑を振り乱して宙に舞ったり、秀江の肉体の一部が嗜^{しみ}味^みをそ

そる食品のように、なまなましく見えたりした。これ等は互^{たが}い違

いに執拗^{しつこ}く明滅^{めいめつ}を繰り返すが、その間にいくつもの意味になら

ない物の形や、不必要に突き詰^つめて行くあだな考えや、ときどき

ぱつと眼を空に開かせるほど、光るものを心にさしつける恐^{きよう}

きは

迫^く 観念などが忙^{いそ}しく去来して、復一の頭をほどよく疲^{つか}らして行つた。

いつか復一の身体は左へ横向きにずつた。そして傾いたボートの船縁^{ふなべり}からすれすれに、蒼^{そうめい}冥^くと暮れた宵色の湖面が覗かれた。宵色の中に当って平沙の渚に、夜になるほど再び捲き起るらしい白浪が、遠近の距離感を外れて、ざーつざーつと鳴る音と共に、復一の醒^さめてまた睡^{ねむ}りに入る意識の手前になり先になりして、明暗の界のも一つの仲間の世界に復一を置く。すると、復一の朦朧とした乾板色の意識が向うの宵色なのか、向うの宵色の景色が復一の意識なのか不明瞭^{ふめいりょう}となり、不明瞭のままに、澱^{よど}み定まって、そこには何でも自由に望みのものが生れそうな力を孕^{はら}んだ楽しい

気分が充ちて来た。

復一の何ものにも捉とらわれぬ心は、夢うつつに考え始めた——
ギリシアの神話に出て来る半神半人の生いきものなぞというものは、あれは思想だけではない、本当に在るものだ。現在でもこの世に生きていても云える。現実に住み飽きてしまったり、現実の粗暴そぼう野卑やひに愛憎あいぞうをつかしたり、あまりに精神の肌質きめのこまかいたため、現実から追い捲まくられたりした生きものであつて、死ぬには、まだ生命力があり過ぎる。さればといつて、神や天上の人になるには稚氣があつて生活に未練を持つ。そういう生きものが、この世界のところどころに悠々と遊んでいるのではあるまいか。真佐子といひ撩乱な金魚といひ生命の故郷はそういう世界に在つて、そ

して、顔だけ現実の世界に出しているのではないかしらん。そう
でなければ、あんな現実でも理想でもない、中間的の美しい顔を
して悠々と世の中に生きていられるはずはない。そういえば真佐
子にしろ金魚にしろ、あのほつきり眼を開いて、いつも朝の寝起
きのような無防禦むぼうぎよの顔つきには、どこか現実を下目に見くだし
て、超人的ちょうじんてきに批判している諷刺ふうしてき的な平明がマスクしている
のではないか……。復一はまたしても真佐子に遇あいたくて堪たまらな
くなった。

浪の音がやや高くなつて、中天に冴えて来た月光を含む水煙が
ほの白く立ち籠こめかかった湖面こゝろに一艘そうの船の影が宙釣ちゆうづつりのよう
に浮び出して来た。艦ろの音が聞えるから夢ではない。近寄つて艦

を漕ぐ女の姿が見えて来た。いよいよ近く漕ぎ寄つて来た。片手を挙げて髪かみのほつれを掻き上げる仕草が見える。途端とたんに振り上げた顔を月光で検あめる。秀江だ。復一は見るべからざるものを見ま
いとするように、急いで眼を瞑つぶつた。

女の船の舳へは復一のボートの腹を擦すつた。

「あら、寝てらっしゃるの」

「……………」

「寝てんの？」

漕ぎ寄せた女は、しばらく息を詰めて復一のその寝顔を見守つていた。

「うちの船が二三艘帰つて来て、あなたが一人でもくもくへ月見

にモーターで入らしつてるといふのよ。だから押しかけて来たわ」

「それはいい。僕は君にとても会いたかった」

女は突とつぜん然愛想よく云われたのでそれをかえって皮肉にとつた。

「なにを寝言いつてらつしやるの。そんないやがらせ云つたつて、素直に私帰りませんけれど、もし寝言のふりしてあたしを胡麻化ごまかすつもりなら、はつきりお断りしときますが、どうせあたしはね。東京の磨いたお嬢さんとは全然較くらべものにはならない田舎いなかの漁師

の娘の……」

「馬鹿ばか、黙だまりたまえ！」

復一は身じろぎもせず、元の仰向けの姿勢のまままで叫んだ。その声が水にひびいて厳しく聞えたので女はぴくりとした。

「僕は君のように皮肉の巧い女は嫌いだ。そんなこと喋りに来たのなら帰りたまえ」

恥辱と嫉妬で身を慄わす女の様子が瞑目している復一にも感
じられた。

噎ぶのを堪え、涙を飲み落す秀江のけはい——案外、早くそれが納つて、船端で水を掬う音がした。復一はわざと瞳の焦点を外しながらちよつと女の様子を覗きすぐにまた眼を閉じた。月の光をたよりに女は、静かに泣顔をハンドミラーで繕っていた。熱いものが飛竜のように復一の胸を斜に飛び過ぎたが心に真佐子を念うと、再び美しい朦朧の意識が紅靄のように彼を包んだ。秀江は思い返したように船べりへ手を置いて、今までのとげとげし

い調子をねばるような笑いに代えて柔く云った。

「ボートへ入つてもいいの」

「……うん……」

復一に突然こんな感情が湧いた——誰も不如意で悲しいのだ。持つてるようでも何かしら欠けている。欲しいもの全部は誰も持ち得ないのだ。そして誰でも寂しいのだ——復一は誰に対しても自分に対しても憐あわれみに堪たえないような気持ちになつた。

名月や湖水を渡る七小町

これは芭蕉ばしやうの句であつたらうか——はつきり判らないがこんなことを云いながら、復一の腕は伸びて、秀江の肩にかかつた。秀江は軟なんたい体動物のように、復一の好むどんな無理な姿態にも堪

えて引寄せられて行つた。

復一はそれとない音信を時々真佐子に出してみるのであつた。湖水の景色の絵葉書に、この綺麗な水で襯衣シヤツを洗うとか、島の絵葉書にこの有名な島へ行く渡船に渡し賃が二銭足りなくて宿から借りたとか。

すると三度か四度目に一度ぐらいの割で、真佐子から返信があつた。それはいよいよようびよう窳ようびよう渺たたるものであつた。

「この頃はお友達の詩人の藤村ふじむら女史に来て貰つて、バロツク時代の服ふくしよく飾しよくの研究を始めた」とか「日本のバロツク時代の天才彫刻家左甚五郎じんごろう作の眠り猫ねむねこを見に日光へ藤村女史と行きました。

とても、可愛らしい」とか。

いよいよ彼女かのじよは現実を遊離する徴候ちようこうを歴然と示して来た。

復一はそのバロック時代なるものを知らないので、試験所の図

書室で百科辞典を調べて見た。それはおうしゆう歐洲ヒュー文芸復興期の人

マニズム主義が自然性からはくり剥離して人間業わざだけが昇華しょうかを遂

げ、哀れな人工だけのけんらん絢爛が造花のように咲き乱れた十七世紀

の時代様式らしい。そしてふと考え合せてみると、復一がぼつぼ

つ調べかけている金魚史の上では、初めて日本へ金魚が輸入され

愛玩げんなされ始めた元和あたりがちようどそれに当っている。すると

金魚というものはバロック時代的産物で、とにも角にも、彼女と

金魚とは切っても切れない縁があるのか。

彼女を非時代的な偶像ぐうぞう型の女と今更憐みや軽蔑を感じながら、復一はまた急に焦りあせ出し、彼女の超越を突き崩くずして、彼女を現実げんじつに誘い出し、彼女の肉情と自分の肉情と、血で結び付きたい願いが、むらむらと燃え上る。それは幾度となく企くわだててその度にうやむやに終らされている願いなのか知れないけれども、燃え上る度に復一を新鮮な情熱に充たさせ、思い止まらすべくもないのだつた。

「生理的から云つても、生活的からいっても異性の肉体というものは嘉称かしょうすべきものです。いま、僕に湖畔の一人の女性が、うやうやしくそれを捧ささげています」

復一は自分ながら嫌味いやみな書きぶりだと思つたが仕方がなかつた。

そして事實はわずかの間で打ち切った秀江との交渉が、今はほとんど絶え絶えになつてゐるのを誇張こちようして手紙を書きながら、復一はいよいよ真剣に彼女との戦闘を開始したように感じられて、ひとりで興奮した。真佐子に少しでもある女の要素が、何と返事を書いて来るにしろ、その中に仄めかほのないことはあるまい。これが真佐子の父親に知れ、よしんば学費が途絶えるにしても真佐子を試すことは今は金魚の研究より復一には焦慮しょうりよすべき問題であつた。

「その女性は、あなたほど美しくはないけれども、……」と書いて、「あなたほど非人情ではありません」とは書きかね、復一は苦笑した。

だんだん刺戟を強くして行つて復一はしきりに秀江との關係を手紙の度に情じょうちよこ緒濃く匂わして行つたが、真佐子からの返事には復一の求めている女性の肉体らしいものは仄めかないで、真佐子が父と共にだんだん金魚に興味を持ち出したこと、父のは産業的功利も混るが、自分のは不思議なほど無我の嗜好や愛感からであることなど、金魚のことばかり書いてある。金魚の研究を怠おこたらなければ復一が何をしようどどんな女性と交渉があらうと構わない書きぶりだった。復一がだんだん真佐子に対する感情をはぐらかされてほとほと性根もつきようとするころ真佐子から来た手紙はこうだった。

「あなたはいろいろ打ち明けて下さるのに私だまってて済みませ

んでした。私もう直じきあかんぼを生みます。それから結婚します。すこし、前後の順序は狂くるったようだけれど。どっちしたって、そうパツシヨネートなものじゃありません」

復一はむしろ呆ぼうぜん然としてしまった。結局、生れながらに自分等のコースより上空を軽々と行く女だ。

「相手はご存じの三人の青年のうちの誰でもありません。もうすこしアツサリしていて、不親切や害をする質の男ではなさそうです。私にはそれでたくさんです」

復一は、またしても、自分のこせこせしたトリツクの多い才子さいし肌はだが、無駄むだなものに顧かえりみられた。この太い線一本で生きて行かれる女が現代にもあると思うとかえって彼女にモダニティーさえ感

じた。

「何という事はないけれど、あなたもその方と結婚した方がよくはなくって。自分が結婚するとなると、人にも勧めたくなるものよ。けれども金魚は一いっしょうけんめい生懸命いやつてよ。素晴らしい、見てみると何もかも忘れてうつとりするような新種を作つてよ。わたしなぜだかわたしの生むあかんぼよりあなたの研究から生れる新種の金魚を見るのが楽しみなくらいよ。わたし、父にすすめていよいよ金魚に力を入れるよう決心さしたわ」

これと前後して鼎造の手紙が復一に届いた。それには、正直に
恐きょうこう慌わう 以来の自家の財政の遣やり繰りを述べ、しかし、断然たる
切り捨てによつて小ぢんまりした陣じんけい形を立直すことが出来、従

つて今後は輸出産業の見込み百パーセントの金魚の飼育と販売に全資力を尽す方針を冷静に書いてあつた。だから君は今後は単なる道楽の給費生ではなくて、商会の技師格として、事業の目的に隷属して働いてもらいたい、給料として送金は増すことにする

復一は生活の見込が安定したというよりも、崖邸の奴等め、親子がかりで、おれを食いにかかったなど、むやみに反抗的の気持ちになつた。

復一は真佐子へも真佐子の父へも手紙の返事を出さず、金魚の研究も一時すつかり放擲して、京洛を茫然と遊び廻つた。だが一ヶ月ほどして帰つて来た時にはすでに復一の心にある覚悟が

決っていた。それはまだこの世の中にかつて存在しなかつたような珍らしく美麗な金魚の新種をつくり出すこと、それを生涯の事業としてかかる自分を人知れぬ悲壯な幸福ひそくを持つ男とし、神秘的な運命に掴まれた無名の英雄のように思い、命を賭かけてもやり切ろうという覚悟だった。それが結局崖邸の親子に利用されることになるのか——さもあらばあれ、それが到底自分にとって思い切れ無い真佐子の喜びともなれば、その喜びが真佐子と自分を共通に繋つなぐ……。それにしてもあの非現実的な美女が非現実的な美魚に牽ひかれる不思議さ、あわれさ。復一は試験室の窓から飴あめのようにとろりとしている春の湖を眺めながら、子供るとき真佐子に喰わされた桜の花びらが上顎の奥にまだ貼り付いているような記憶を

舌で舐め返した。

「真佐子、真佐子」と名を呼ぶと、復一は自分ながらおかしいほどセンチメンタルな涙がこぼれた。

復一の神経衰弱すいじやくが嵩こそうじて、すこし、おかしくなつて来たといふ噂が高まつた。

事実、しんしんと更ふけた深夜の研究室にただ

一人残つて標品プレパラートを作つてゐる復一の姿は物凄ものすごかつた。辺り

が森閑しんかんと暗い研究室の中で復一は自分のテーブルの上だけに電

燈を点つけて次から次へと金魚を縦に割き、輪切にし、切り刻んで

取り出した臓器を一面に撒乱さんらんさせ、じつと拡大鏡で覗いたり、

ピンセットでいじり廻したりして深夜に至るも、夜を忘れた一心

不乱の態度が、何か夜の猛禽もうきんじゆう獣が餌を予想外にたくさん見付

け、喰べるのも忘れて、しばらくもてあそ弄ぶかつこう恰好かっこうに似ていた。切られた金魚の首は電燈の光に明るく透けてルビーのように光る目を見開き、口を思い出したように時々開閉していた。

都会育ちで、刺戟にちのう応じて智能が多方面に働き易く習性付けられた青年の復一が、専門の中でも専門の、しかも、根氣と単調に堪えねばならない金魚の遺伝とせいしよく生殖せいよくに関してだけを研究することは自分の才能を、小さい焦点へ絞り狭せまめるだけでも人一倍骨が折れた。頬ほおも眼も窪ませた復一は、力も尽き果てたと思うとき、くつたりして窓際へ行き、そこに並べてある硝子鉢ガラスばちの一つの覆おほいに手をかける。指先は冷血たましていて氷のようなのに、溜たまった興奮おほがびりびり指をもつら纏もつらしてもつら慄おそえている。やっと覆いを取ると、眼を

開いたまま寝ていた小石の上の金魚中での名品キャリコは電燈の光に、眼を開いたまま眼を醒さまして、一とこかろに固かつていた二ひきが悠揚ゆうようと連れになつたり、離れたりして遊ゆう弋よくし出す。身長身幅より三四倍もある尾鱗おびれは黒いまだらの星のある薄うすぎぬ絹ぬの領布ひれや裳もを振り撒き拵おけて、しばらくは身体も頭も見えない。やがてその中から小肥こふとりの仏蘭西美人フランスのような、天てん平びようの娘子ようのようにおっとりして雄大な、丸い銅と蛾眉がびを描いてやりたい眼と口とがぽつかりと現れて来る。

二三年前、〇市に水産共進会があつて、その際、金牌きんぱいを獲かち得たこの金魚の名品が試験所に寄附きふされて、大事に育てられているのだ。すでに七八歳さいになつていたので、ちよつと中年を過ぎた

落付きを持って居るので、その魅力は垢脱けがしていた。

しばらく眺め入った後、復一は硝子鉢に元のように覆いをして、それから自分のもとの席に戻るとき、いまキャリコのしたと同じ身体の捻り方を、しきりに繰返す。人に訊かれると彼は笑つて「金魚運動」と説明して、その健康法の功德を吹聴するが、この際、復一がそれをするとき、復一にはもつと秘んでいる内容的力が精神肉体に恢復して来るのであった。復一はそれを決して誰にも説明しなかつた。

とにかく、深夜に、人が魚と同じリズムの動作のくねらせ方をするので、とても薄気味が悪かつた。宿直の小使がいつた。

「私が室に入るときだけは、あれ、やめて下さい。へんな気持ち

になりますから」

復一は関西での金魚の飼育地で有名な奈良大^{なら}阪^{おおさか}府^{おほ}県^{さか}下^かを視察に廻った。奈良県下の郡^{こおりやま}山^まはわけて昔^{むかし}から金魚飼育の盛んな土地で、それは小^{しょうはん}藩^{はん}の関係から貧しい藩士の収入を補わせるため、藩士だけに金魚飼育の特権を与えて、保護^{しやうれい}奨^い励^いしたためであつた。

この菜の花の平野に囲まれた清^{せい}艶^{えん}な小都市に、復一は滞^{たいざい}在^{ざい}して、いろいろ専門学上の参考になる実地の経験を得たが、特に彼の心に響いたものは、この郡山の金魚は寛^{かんえい}永^{えい}年^{ねん}間^{かん}にすでに新種^{こしら}を拵^しえ^らかけていて、以後しばしば秀^{しゅう}逸^{いつ}の魚を出しかけた気配^{うかが}が記録によつて覗^{うかが}えることである。そして、そこに孕^うま^かれた金

魚に望むところの人間の美の理想を、推理の延長によつて、計つてみるのに、ほぼ大正時代に完成されている名魚たちに近い図が想定された。とはいへ、まだまだ現代の金魚は不完全であるほど昔の人間は美しい撩乱をこの魚に望んでいることが、復一に考えられた。世は移り人は幾代も変つてゐる。しかし、金魚は、この喰べられもしない観賞魚は、幾分の変遷へんせんを、たった一つのか弱い美の力で切り抜けながら、どうなりこうなり自己完成の目的に近づいて来た。これを想うに人が金魚を作つて行くのではなく、金魚自身の目的が、人間の美に牽かれる一番弱い本能を誘惑し利用して、着々、目的のコースを進めつつあるように考えられる。遅ましい金魚——そう気づくと復一は一種の征服慾さえ加つてい

よいよ金魚に執着して行つた。

夏中、視察に歩いて、復一が湖畔の宿へ落付いた半ヶ月目、関東の大震災だいしんさいが報ぜられた。復一は始めはそれほど思わなかつた。次に、これはよほど酷ひどいと思うようになった。山の手は助つたことが判つたが、とにかく惨澹さんたんたる東京の被害実状が次々に報ぜられた。復一は一応東京へ帰ろうかと問い合せた。

「ソレニハオヨバヌ」という返電が、ようやく十日ほど経つて来て、復一はやつと安心した。

鼎造から金魚に関する事務的の命令やら照会やらが復一へ頻ひんび々と来まんだした。

復一が、こういう災害の時期に、金魚のような遊戯ゆうぎ的てきのもの

には、もう、人は振り向かないだろうと、心配して問合せてやると、鼎造からこう云つて来た。

「古老の話によると、旧幕以来、こういう災害のあとには金魚は必ず売れたものである。荒びあらびすさんだ焼跡やけあとの仮小屋いしやの慰藉いしやになるものは金魚以外にはない。東京の金魚業一同は踏み止まつて倍層商売を建て直すことに決心した」

これは商売人一流の誇張に過ぎた文面かと、復一は多少疑つていたが、それでもなかつた。二割方の値上げをして売出した金魚は、たちまち更に二割の値上げをしても需要に応じ切れなくなつた。

下町方面の養魚池はほとんど全滅したが、山の手は助かつた。

それに関西地方から移入が出来るので、金魚そのものには不自由しなかつたが、金魚桶の焼失は大打撃であつた。持ち合せているものはこれを仲間分配到し、人を諸方に出して急造させた。

関西方面からの移入、桶の注文、そんな用事で、復一はなおしばらく関西にとどまらなければならなかつた。

ようやく、鼎造から呼び戻されて、四年振りで復一は東京に帰ることが出来た。論文はついに完成しなかつた。復一よりも単純な研究で定期間に済んだ同期生たちは半年前の秋に論文が通過して、試験所研究生終了の証書を貰つてそれぞれ約定済の任地へ就職して行つた。彼は、鼎造にしばらく帰京の猶予ゆうよを乞こうて、論文

を纏めれば纏められないこともなかったが、そんな小さくまとまった成功が今の自分の気持ちに、何の関係があるかと蔑さげすまれた。早くわが池で、わが腕で、真佐子に似た撩乱の金魚を一びきでも創り出して、凱歌がいかを奏したい。これこそ今、彼の人生に残っている唯一の希望だ、——彼が初め、いままでの世になかった美麗な金魚の新種を造り出す覚悟をしたのは、ひたすら真佐子の望みのために実現しようとした覚悟であつた。だが年月の推移につれ研究の進むにつれ、彼の心理も變つて行つた。彼は到底現実の真佐子を得られない代だい償しょうとしてほとんど真佐子を髻ほう髻ふつさせる美魚を創造したいという意慾がむしろ初めの覚悟に勝つて来た。漂渺とした真佐子の美——それは豊麗な金魚の美によつて髻髻する

よりほかの何物によつてもなし得ない。今や復一の研究とその効果の実現はますます彼の必死な生命的事業となつて来ていたのである。

それを想うとき、彼は疲れ切つて夜中の寢床に横わりながらも闇の中に爛々らんらんと光る眼を閉じることが出来なかつた。

「馬鹿だよ、君。君の研究を論文にでも纏めれば世界的に金魚学者たちの参考になるんだからなあ——」

まだ未練氣にそう云つてる不機嫌ふきげんの教授に訣れを告げて、復一は中途退学の形で東京に歸つた。未完成の草稿そうごうを焼き捨てるとか、湖中へ沈めるとかいう考えも浮ばないではなかつたが、それほど華やかな芝居しばいぎ氣さえなくなつていて、ただ反古ほごより、多少惜

しいぐらいの気持ちで、草稿は鞆かばんの中へ入れて持ち帰った。

地震の翌年の春なので、東京の下町はまだ酷ひどかったが、山の手は昔に変わりはなかった。谷窪の家には、湧き水の出場所が少し変わったといので、棕櫚しゆるなわ縄の繻ほうたい帯をした竹樋たけどいで池の水の遣り繰りをしてあつた。

帰宅と帰任とを兼ねたような挨拶あいさつをしに、復一は崖を上つて崖邸の家を訊ねた。

鼎造は復一が関西からの金魚輸送の労を謝した後云つた。

「実は、調子に乗つて鯉こいと鰻うなぎの養殖にも手を出しかけているんだが、人任せでうまく行かないんだ。同じ淡水産のものだからそう違ふまい。君に一つその方の面倒を見て貰おうか。この方が成功

すれば、金魚と違つて食糧しよくりようひん品だから販路はすばらしく大きいのだ」

もちろん復一は言下に断つた。

「だめですね。詩を作るものに田を作れというようなもんです。そればかりでなく、お願いしておきますが、僕には最高級の金魚を作る専門の方をやらせて下さい。これなら、命と取り換えつこのつもりでやりますから」

「僕は家内も要らなければ、子孫を遺す気もありません。素晴らしく豊麗な金魚の新種を創り出す——これが僕の終生の望みです。見込み違いのものに金をつぎ込んだと思われたら、非常にお気の毒ですが」

復一の氣勢を見て、動かすべからざることを悟つた^{さと}鼎造は、もう頭を次に働かせて、彼のこの執着をまた商売に利用する手段もないことはあるまいと思ひ返した。

「面白い。やりたまえ。君が満足するものが出来るまで、僕も、^{さいそく}催促せず待つことにしよう」

鼎造自身も、自分の豪^{ごうほう}放らしい言葉に、久し振りに英雄的な気分になれたらしく、上機嫌になつて、晚めしを一しよに喰いたいけれども、外^{はず}せぬ用事があるからと断つて、真佐子と婿に代理をさせようと、女中に呼びにやらして、自分は出て行つた。

復一に、何となく息の詰まる数分があつて、やがて、応接間のドアが半分開かれ、案外はにかなだ顔の真佐子が、斜に上半身を

現した。

「しばらく」

そして、容易には中に入つて来なかつた。復一は永い間渴^{かつ}していた好みのものは、見ただけで満足されるという康^{やす}らいだ溜息^{ためいき}がひとりでに吐かれるのを自分で感じ、無条件に笑顔を取り交わしたい、孤独の寂しさがつき上げて来たが、何ものかがそれをさせなかつた。それをしたら、即座^{そくざ}に彼女の魅力の膝下^{しつか}に踏まえられて、せつかく、固持して来た覚悟を苦もなく溲^{さら}つて行かれそうな予感が彼を警戒さしたのであろう。彼の意地はむしろ彼女の思いがけない弱気を示した態度につけ込んで、出来るだけの強味と素気なさを見せていようと度胸を極^きめた。彼は苦勞した年^{とし}嵩^{かさ}の

男性の威を力み出すようにして「お入りなさい。なぜ入らないのです」といった。

彼女は子供らしく、一度ちよつとドアの蔭へ顔を引込ませ、今度改めてドアを公式に開けて入つて来たときは、胸は昔のごとく張り、^{すわ}据り方にゆるぎのない頸つき、昔のように漂渺とした顔の唇には蜂^{はちみつ}蜜ほどの甘みのある片笑いで、やや尻下りの大きな眼を正眼に煙らせて来た。眉^{まゆ}だけは時代風に濃く描いていた。復一はもう伏^{ふしめがち}目勝になつて、気合い負けを感じ、寂しく孤独の殻^{から}の中に引込まねばならなかつた。

「しばらく、ずいぶん痩せたわね」

しかし、彼女は云うほど復一を丁寧^{ていねい}に観察したのでもなかつた。

「ええ。苦労しましたからね」

「そう。でも苦労するのは薬ですってよ」

それからしばらく話は地震のことや、復一のいた湖の話に外れ
た。

「金魚、いいの出来た？」

これに返事することは、今のところいろいろの事情から、復一
には困難だった。勇気を起して復一は逆襲ぎやくしゆうした。

「お婿むこさん、どうです」

「別に」

彼女はちよつと窓から、母屋の縁外の木の茂しげみを覗つて

「いま、いないのよ。バスケットボールが好きで、YMCAへ行

つて、お夕飯ぎりぎりできや帰つて来ないの、ほほほ」

子供のように夫を見做みなしているような彼女の口振りに、夫を愛していないとも受取れない判断を下すことは、復一に取つてとても苦痛だった。進んで子供のことなぞ訊けなかった。

「ご紹介してもあなたには興味のないらしい人よ」

それは本当だと思つた。自分の偶像であるこの女を欠き碎くだかない夫ならそれで充じゆう分ぶんとしなければならぬ。その程度の夫なら、むしろ持つていてくれる方が、自分は安心するかも知れない。

「ときどきものを送つて下さつて有難う」

「これは湖のそばで出来た陶とう物ものです」

復一は紙かみづつみ包づつみを置いて立ち上つた。

「まあ、お気の毒ね。復一さんが帰ってらして私も心強くなりま
すわよ」

復一は逢^あつてみれば平凡な彼女に力^{ちから}抜けを感じた。どうして自
分が、あんな女に全生涯までも影響されるのかと、不思議に感じ
た。薄暗くなりかけの崖の道を下りかけていると、晚^{ばん}鶯^{おう}が鳴き、
山^{やま}吹^{ふき}がほろほろと散った。復一はまたしてもこどもの時真佐子
の浴せた顎の裏の桜の花びらを想い起し、思わずそこへ舌の尖を
やった。何であろうと自分は彼女を愛しているのだ。その愛はあ
まりに惑^{まど}つて宙に浮いてしまつてるのだ。今更、彼女に向けて露^ろ
骨^{こつ}に投げかけられるものでもなし、さればと云つて胸に秘め籠め
て置くにも置かれなくなっている。やっぱり手慣れた生きものの

金魚で彼女を作るより仕方がない。復一はそこからはるばる眼下に見える谷窪の池を見下して、奇矯ききょうな勇気を奮い起した。

谷窪の家の庭にささやかながらも、コンクリート建ての研究室が出来、新式の飼育のプールが出来てみれば、復一には楽しくないこともなかった。彼は親類や友人づきあいもせず一心不乱に立て籠った。崖屋敷の人達にも研究を遂とげる日までなるべく足を向けてもらわぬようそれとなく断っておいた。

「表面に埋うもれて、髓ずいのいのちに喰い込んで行く」

そういう実の入った感じが無いでもなかった。自分の愛人を自分の手で創造する……それはまたこの世に美しく生れ出る新らし

い星だ……この事は世界の誰も知らないのだ。彼は寂しい狭い感か慨んがいに耽ふけつた。彼は郡山の古道具屋で見付けた「神魚華鬢之図しんぎよけまんのず」を額縁に入れて壁に釣りかけ、縁側に椅子いすを出して、そこから眺めた。初夏の風がそよそよと彼を吹いた。青葉の揮発性の匂いがした。ふと彼は湖畔の試験所に飼われてある中老美人のキヤリコを新らしい飼手がうまく養っているかが気になった。

「あんな旧いふるものは見殺しにするほどの度胸がなければ、新しいものを創生する大業は仕了しおわせられるものではない。」
ついでにちらりと秀江の姿が浮んだ。

彼はわざとキヤリコが粗腐病にかかつて、身体が錆さびだらけになり、喘あえぐことさえ出来なくなつて水面に臭くさく浮いている姿を想像

した。ついでにそれが秀江の姿でもあることを想像した。すると熱いものが脊髄せきずいの両側を駆け上つて、喉元のどもとを切なく衝き上げて来る。彼は唇を噛んでそれを顎の辺で喰い止めた。

「おれは平気だ」と云った。

その歳は金魚の交媒には多少季遅れであり、まだ、プールの灰あ汁くもよく脱けていないので、産卵は思いとどまり、復一は親魚の詮せん索さくにかかった。彼は東京中の飼育商や、素人飼育家を隈くまなく尋たずねた。覗のぞつた魚は相手が手離はなさなかつた。すると彼は毒口を吐はいてその金魚を罵倒ばとうするのであつた。

「復一ぐらい嫌な奴はない。あいつはタガメだ」

こういう評判が金魚仲間^{きょうぼうせい}に立つた。タガメは金魚に取付くの
に凶暴性^{きょうぼうせい}を持つ害虫である。そんなことを云われながらも彼
はどうやらこうやら、その姉妹魚の方をでも手に入れて来るので
あつた。彼の信じて立てた方針では、完成文化魚のキャリコとか
秋錦とかにもう一つ異種の交媒^{はくしや}の拍車をかけて理想魚を作るつ
もりだつた。

翌年の花どきが来て、雄魚たちの胸鰭^{うろお}を中心に交尾期を現す追
星が春の宵空のように潤^{うるお}つた目を開いた。すると魚たちの「性」
は、己^{おのれ}に堪えないような素振りを魚たちにさせる。艦隊^{かんたい}のよう
に魚以上の堂々とした隊列で遊弋し、また闘^{とうけい}鶏のように互いに
瞬間^{すんど}を鋭く啄^{つつ}き合う。身体に燃えるぬめりを水で扱き取ろうとし

て異様にひるがえに翻り、翻り、翻る。意志にとどこお礙つて肉情はほとんどその方へ融ゆうずう通してしまった木人のような復一はこれを見るとどうやらほんのり世の中にいろ気を感じ、珍らしく独りでぶらぶら六本木の夜町へ散歩に出たり、晩飯の膳ぜんにビールを一本注文したりするのだった。

それを運んで来た養母のお常は

「あたしたちももう隠いんきよ居したのだから、早くお前さんにお嫁さんを貰つて、本当の樂をしたいものだね」世間並に結婚を督とくそく促した。

「僕の家内は金魚ですよ」

酔よいに紛れて、そういう人事には楔くさびをうっておくつもりで、復

一はこういうと、養母は

「まさか——おまえさんはいつたい子供のとときから金魚は大して好きでなかったはずだよ」と云つた。

養父の宗十郎はこの頃擡頭たいとうした古典復活の氣運に唆そそられて、再び荻江節の師匠に戻りたがり、四十年振りだという述懐じゆっかいを前触まえぶれにして三味線しゃみせんのばちを取り上げた。

荻江節

松はつらいとな、人ごとに、皆みないは根の松よ。おおまだ歳若
な、ああ姫小松ひめこまつ。なんぼ花ある、梅うめ、桃もも、桜。一木ざかりの
八重一重……。

復一にはうまいのかまずいのか判らなかつたが、連翹れんぎょうの花

を距へだてた母屋から聴えるのびやかな皺しわがれ嗶ごえ声を聴くと、執着の流
れを覚束なく棹さおさす一個の人間がしみじみ憐れに思えた。

養父はふだん相変らず、駄金魚を牧草のように作っていたが、
出来たものは鼎造の商會が買上げてくれるので販売は骨折らずに
済んだ。だが

「とても廉やすく仕切るので、素しろ人の商売人には敵かなわないよ。復一、
お前は鼎造に氣に入っているのだから、代りにたんまりふんだく
れ」

と宗十郎はこぼしていった。そして多額の研究費を復一の代理
になって鼎造から取って来て痛快がついていた。

復一は親達が何を云つても黙つて聞き流しながらせつせとプー

ルの水を更えた。別々に置いてある雄魚と雌魚とをそつといつしよにしてやった。それから湖のもくもくから遙々採つて来た柳のひげ根の消毒したものを大事そうに縄なわに挟はさんで沈めた。

空は濃青に澄すみ濼んで、小鳥は陽の光を水飴のように翼つばさや背中に粘ねばらしている朝があつた。縁側から空気の中に手を差出してみたり、頬を突き出してみたりした復一は、やがて

「風もない。よし——」といった。

日覆いの葭簾を三分ほどめくつて、覗く隙間すきまを慥こしらえて待つていと、列を作つた三匹の雄魚は順々に海戦しやうかくとつげきの衝角突撃しやうかくとつげきのようにして、一匹の雌魚を、柳のひげ根たばの束の中へ追い込もうとして

いる。雌は避けられるだけは避けて、免れようとする。なぜであらうか。処女の恥辱のためであらうか。生物は本来、性の独立をいとおしむためか。それともかえって雄を誘うコケツトリーか。ついに免れ切れなくなつて、雌魚は柳のひげ根に美しい小粒の真珠のような産卵を撒き散らして逃げて行く。雄魚等は勝利の腹を閃めかして一つ一つの産卵に電撃を与える。

気がついてみると、復一は両肘を蹲んだ膝頭につけて、確かたく握り合せた両手の指の節を更にぎに口にあててきつく噛みつつ、衷ちゆう心しんから祈っているのであつた。いかにささやかなものでも生がこの世に取り出されるといふことはおろそかには済まされぬことだ。復一のように厭人症えんじんしょうにかかつているものには、生むも

のが人間に遠ざかった生物であるほど緊密な衝動を受けるのであった。まして、危惧きぐを懐いだいていた異種の金魚と金魚が、復一のエゴイスチックの目的のために、協同して生を取り出してくれるということは、復一にはどんなに感謝しても足りない気がした。

休養のために、雌魚と雄魚とを別々に離した。そして滋養じようを与えるために白身の軽さい肴かなを煮ていると、復一は男ながら母性の慈いつくしみに瘦せた身体もいっぱいに膨ふくれる気がするのであった。

しかし、その歳ふか躰か化した仔魚は、復一の望んでいたよりも、媚こび過ぎてて下品なものであった。

これを二年続けて失敗した復一は、全然出発点から計画を改め

て建て直しにかかった。彼は骨組の親魚からして間違っていたことに気付いた。彼の望む美魚はどうしても童女型の稚純を胴にしてそれに絢爛びしょくやら媚色びしょくやらを加えねばならなかった。そして、これには原種の蘭鑄より仕立て上げる以外に、その感じの胴を持った金魚はない。復一のところに、真佐子の子供のときの蘭鑄に似た稚純な姿が思い出された。ともかくにも真佐子に影響されていることの多い自分に、彼は久し振りに口惜くやしさを繰り返した。その苦痛は今ではかえってなつかしかった。

しかし、彼は弱る心を奮い立たせ、いったん真佐子の影響に降伏して蘭鑄の素朴そぼくに還かえろうとも、も一度彼女の現在同様の美感の程度にまで一匹の金魚を仕立て上げてしまえば、それを親魚にし

て、仔こに仔を産ませ、それから先はたとえ遅々ちちたりとも一步の美をわが金魚に進むれば、一步のわれの勝利であり、その勝利の美魚を自分に隷属させることが出来ると、強いて闘志を燃し立てた。こここのところを考えて、しばらく、忍しのぶべきであると復一は考えた。復一は美事な蘭鑄の親魚を関西から取り寄せて、来るべき交媒の春を待った。蘭鑄は胴は稚純で可愛らしかった。が顔はブルドッグのように犼どうもう猛で、美しい縹ひょうち織の金魚を媒かけてまずその犼猛を取り除くことが肝腎かんじんだった。

崖邸にもあまり近づかない復一は真佐子の夫にもめつたに逢わなかったが真佐子の夫という男は、眼は神経質に切れ上り、鼻筋

が通つて、ちよつと頬骨が高く男性的の人体電気の鋭そうな、美青年の紳士しんしであつた。ある日曜日しんしの朝のうち真佐子と女の子を連れて、ロマネスクの茶亭へ来て、外字新聞を読んだりしていた。その時すぐ下の崖の中途の汚水の溜りから金魚の餌のあかこを採つて降りようとした復一がふとそこを見上げたが、復一はそれなり知らぬ振りですつさと崖を降りてしまった。それを見た真佐子はそこに夫と居ながら、二人一緒に居るのが何だかうしろめたかつた。

「いいじゃないか。なぜさ」

と夫は無雑作に云つた。

「だって、ここで二人並んで居るのをどこからでも見えるでしょ

う」

と真佐子は平らに押した。

「どうして君とおれと、ここに居るのが人に見えて悪いのかね」

夫の言葉には多少嫌味が含んでいるようだ。

「何も悪いってことありませんけど、谷窪の家の人達から見えるでしょう。あの人まだ独身なんですもの」

「金魚の技師の復一君のことかね」

「そうです」

すると夫はやや興奮して軽蔑的に

「君もその人と結婚したらよかつたんだろう」

すると真佐子は相手の的から外れて、例の漂渺とした顔になっ

て云った。

「あたしは、とても、縹緖好みなんですわ。夫なんかには。そうでないと一緒にいっしょにご飯も喰べられないんです」

「敵わんね。君には」怒おこることも笑うことも出来なくなった夫は、「さあ、お湯にでも入ろうかね」と子供を抱いて中へ入って行った。

そのあとのロマネスクの茶亭に腰掛けて真佐子は何を考えているか、常人にはほとんど見当のつかない眼差まなざししを燻くゆらして、寂しい冬の日の当る麻布の台をいつまでも眺めていた。

「鯉と鰻の養殖がうまく行かないので、鼎造、この頃四苦八苦ら

しいよ。養魚場が金を喰い出したら大きいからね」

築けども築けども湧き水が垣かきの台を浮かした。県下の半鹹半

淡んたんの入江の洲岸に鼎造はうっかり場所を選定してしまったので

あった。その上都会に近い静岡県下の養魚場が発達して、交通の便を利用して、鯉鰻りまんを供給するので、鼎造の商会は産魚の販売に

も苦戦を免れなかった。しかし、痛手の急性の現われは何といつても、この春財界を襲った未曾有みぞうの金融きんゆう恐慌きようこうで、花どきの

終り頃からモラトリアムが施行しこうされた。鼎造の遣り繰りの相手になっていた銀行は休業したまま再開店は覚束ないと噂された。

「復一君の研究費を何とか節約してもらえんかね、とさすが鼎造のあの黒い顔も弱味を吹いたよ」

年寄は、結局、復一の研究費は三分の一に切詰めることを鼎造に向つて承知して来たにも拘らず、鼎造の窮きゆうはく迫おぼを小気味よげに復一に話した。

それを他人事のように聞き流しながら、復一は関西から届いた蘭鑄つがの番ばんいに冬越しの用意をしてやつていた。菰こもを厚く巻いてやるプールの中へ、差し込む薄日に短い鰭と尾を忙しく動かすと薄墨の肌からあたたかい金爛の光が眼を射て、不恰好なほどにも丸く肥えて愛くるしい魚の胴が遅々として進む。復一は生ける精分を対象に感じ、死灰の空漠を自分に感じ、何だか自分が二つに分れたもののように想えて面白い気がした。復一は久し振りに声を挙げて笑った。すると宗十郎が背中を叩いて云った。

「びつくりするじゃないか。氣狂きちがいみたいな笑い方をして、いくら暢氣のんきなおれでも、ひやりとしたよ」

年の暮も詰ってから真佐子に二番目の女の子が生れたという話で、復一は崖上の中祠堂に真佐子の姿を見ずに年も越え、梅の咲く頃に、彼女の姿を始めて見た。また子を産んで、水を更えた後の藻もの色のように彼女の美はますます澄ちようめい明と絢爛を加えた。

復一が研究室に額にして飾っておく神魚華鬘の感じにさえ、彼女は近づいたと思った。今日は真佐子は午後から女詩人の藤村女史とロマネスクの休亭に来ていた。二人の女は熱心に話し合っている。枯骨瓢ここつひょうひょう々となった復一も、さすがに彼女等が何を話するか

探りたかった。夕方近くあかこを取ることを装よそつて、復一はこそ
こそと崖の途中の汚水の溜りまで登つて、そこで蹲うずくまつた。彼は三
十前なのに大分老い晒さらした人のような身体つきや動作になつてい
た。二人の婦人が大分前から話しつつづけていた問題だつたらしい。
けれど復一のところまでははつきり聞えて来なかつた。実はそこ
で藤村女史と真佐子との間に交されている会話の要点はこんなこ
となのである……真佐子が部屋をロココに装飾し更えようと提議
するのに藤村女史は苦り切つた間らしいものを置いて、
「四五年前にあなたがバロツクに凝こつたさえ、わたしは内心あん
まり人工的過ぎると思つて賛成しなかつたのよ。まして、ロココ
に進むなんて一層人工的ですよ。趣味として滅亡の一步前の美じ

やなくつて」

「でも、どうしてもそうしたくつて仕方がないのよ」

「真佐子さん、あなたは変つてるわね」

「そうかしら。あたしはあなたがいつかわたしのことおっしやつたように、実際、蒼空と雲を眺めていて、それが海と島に思える」と云つた性質でしようね」

復一はそつと庭へ降りて来て、目だたぬ様に軒のきづた伝いに夕暮近

い研究室へ入つた。復一はその粗末な椅子によつてじつと眼を瞑つむつた。彼は近頃ほとんど真佐子と直接逢つてはいない。今日の

ように真佐子が中祠堂に友人と連れ立って来てても子供や夫と来てもほとんどそこで云う真佐子達の会話は聞き取れない。だが復一

は遠くからでも近頃の真佐子のけはいを感じて、今は自分に托した金魚の事さえ真佐子は忘れているかも知れない、真佐子はますます非現実的な美女に気化して行くよう^{はか}で儚ない哀感が沁々と湧くのであった。

蘭鑄から根本的に交媒を始め出した復一はおよその骨組の金魚を作るのに三年かかった。それから改めて、年々の失敗へと出立した。

「日暮れて道遠し」

復一は目的違いの金魚が出来ると、こう云った。しかし、ただ云うだけで、何の感傷も持たなかった。ただ、いよいよ生きなが

ら白骨化して行く自分を感じて、これではいけないとたとえ遠くからでも無理にも真佐子を眺めて敵愾心てきがいしんやら嫉妬にくしやら、憎みやらを絞り出すことによつて、意力にバウンドをつけた。

古池には出来損じの名金魚がかなり溜つた。復一が売ることを絶対に嫌うので、宗十郎夫婦は、ぶつぶつ云いながら崖下の古池へ捨てるように餌をやっていた。宗十郎夫婦は苦笑してこの池を金魚の姥捨うばすて場だといつていた。

それからまた失敗の十年の月日が経つた。崖の上下に多少の推移があつた。鼎造は死んで、養子が崖邸の主人となり、極めて事業を切り縮めて踏襲とうしゅうした。主人となつた夫は真佐子という美妻があるに拘かかわらず、狎ちんの様な小間使に手をつけて、妾めかけ同様にして

いるという噂が伝わった。婿の代になって崖の上からの研究費は断られたので、復一は全く孤立無援こりつむえんの研究家となった。

宗十郎は死んで一人か二人しか弟子のない荻江節教授の道路口の小門の札も外された。

真佐子は相変わらず、ときどきロマネスクの休亭に姿を見せた。現実の推移はいくらか癖づいた彼女の眉ひその顰め方に魅力を増すに役立つばかりだ。いよいよ中年近い美人として冴え返って行く。

昭和七年の晩秋に京浜に大暴風雨があつて、東京市内は坪当りつぼ三石一斗ごくの雨量に、谷窪の大溝も溢れ出し、せつかく、仕立て上げた種金魚の片魚を流してしまった。

同じく十年の中秋の豪雨は坪当り一石三斗で、この時もほとん

ど流しかけた。

そんなことで、次の年々からは秋になると、復一は神経を焦立いらだてていた。ちよつとした低気圧にも瘡かんを昂たかぶらせて、夜もおろおろ寝られなかった。だいぶ前から不眠症にかかつて催眠剤さいみんざいを撰とらねば寝付きの悪くなっていた彼は、秋近の夜の眠のためには、いよいよ薬を強めねばならなかった。

その夜は別に低気圧の予告もなかったのだが、夜中から始めてぼつぼつ降り出した。復一は秋口だけに、「さあ、ことだ」とベツドの中で脅おびえながら、何度も起き上ろうとしたが、意識が朦朧もうろうとして、身体もまるで痺しびれているようだった。雨声あめこゑが激しくなると、びくりとするが、その神経の脅おびえは薬力やくりきに和なごめられて、かえ

つて、すぐその後は眠気を深めさせる。復一はベッドに仰向けに両肘を突つ張り、起き上ろうとする姿勢のまま、口と眼を半開きにしてしばらくいびき、軒をかいていた。ようやく薬力が薄らいで、復一が起き上れたのは、明け方近くだった。

雨は止んで空の雲行は早かった。なまりいろ鉛色の谷窪の天地に木々は濡れ傘ぬがさのように重くすぼ搾まって、白い雪しずくをふしだらに垂らしていた。崖肌は黒く湿つて、またその中に水を浸み出す砂の層が大きな横縞よこじまになっていた。崖端のロマネスクの休亭は古城塞こじょうさいのように視覚から遠ざかつて、これ一つ周囲と調子外かたれに堅いものに見えた。

七つ八つの金魚は静まり返つて、藻や太藷ふとしいが風の狼藉の跡に踏

みしだかれていた。耳に立つ音としては水の雫の滴る音がするばかりで、他に何の異状もないように思われた。魯鈍無情の鴉の聲が、道路傍の住家の屋根の上に明け方の薄霧を綻ばして過ぎた。大溝の水は増したが、溢れるほどでもなく、ふだんのせせらぎはなみなみと充ちた水勢に大まかな流れとなつて、かえつて間が抜けていた。

「これなら、大したことはない」

と復一は呟きながら念のためプールの方へ赤土路をよろめく跣足の踵に寝まきの裾を貼り付かせ、少しだらだらと踏み下ろして行つた。

プールが目に入ると、復一はひやりとして、心臓は電撃を受け

たような衝動を感じた。

小径の途中の土の層から大溝の浸み水が洩れ出て、音もなく平に、プールの葭簾を撫で落し、金網を大口にぱくりと開けてしまっている。プールに流れ入った水勢は底に当って、そこから弾き上り、四方へ流れ落ちて、プールの縁から天然の湧き井の清水のように溢れ落ちていた。

復一が覗くと、底の小石と千切られた藻の根だけ鮮かに、金魚は影も形も見えなかった。

復一はかっとなつて、端の綴じが僅か残っている金網を怒りの足で蹴り放った。その拍子に跣足の片足を赤土に踏み滑らし、横倒しになると、坂になつている小径を滝のように流れている水

勢が、骨と皮ばかりになつてゐる復一を軽々と流し、崖下の古池ほとりの畔まで落して来た。復一はようやくその腐葉土ふようどのぬかるみで、危あやうく踏み止まつた。

年来理想の新種を得るのにまだまだ幾多の交媒と工夫を重ねなければならぬ前途あんたん暗澹たる状態であるのに、今またプールの親金魚をこの水で失くすとすれば、十四年の苦心は水の泡あわになつて、元も子も失くしてしまふ。復一は精も根も一度に尽き果て、どうくつ洞窟のように黒く深まる古池の傍にへたへたと身を崩折らせ、しばらく意識を喪失そうしつしていた。

しばらくして復一が意識を恢かい復ふくして来ると、天地は薔薇色に明け放たれていて、谷窪の万象は生々の気を盆地一ぱいに薰かおらし

ている。かがや輝く蒼空をいま瀉すき出すように頭上の薄膜はくまくの雲は見る見る剥はがれつつあった。

何という新鮮で濃情な草樹の息づかいであろう。緑も樺かばも橙だいだいも黄も、その葉の茂みはおのおのその膨らみの中に強い胸を一つずつ蔵くらしていて、溢れる生命に喘いでいるように見える。しどろもどろの叢くさむらは雫つゆの露をぶるぶる振り払いつつ張つて来た乳房ちぶさのような俵形にこんもり形を盛り直している。

耳の注意を振り向けるあらゆるところに、潺せん浚かんの音が自由に聴き出され、その急造の小溪けいりゅう流の響きは、眼前に展開している自然を、動的なものに律動化し、聴き澄している復一を大地ごと無限の空間に移して、悠久に白雲上へ旅させるように感じさせ

る。

もろもろの陰は深い瑠璃色るりいろに、もろもろの明るみはうつとりした琥珀色こはくいろの二つに統制されて来ると、道路側の瓦屋根かわらの一角がたちまち灼熱しゃくねつして、紫白しはくの光芒こうぼうを撥開はっかいし、そこから縊より出す閃光のテープを谷窪のそれを望むものに投げかけた。

鏡面を洗い澄ましたような初秋の太陽が昇ったのだ。小鳥の鳴声こゝろが今更賑わしく鮮明な空間の壁へき絨じゆうをあつちへこつちへ縫いつつ飛ぶ。

極度の緊張に脳貧血を起していったん意識を喪うしない、再び恢復して来たときの復一の心身は、ただ一箇この透明とうめいな観照体となつて、何も思い出さず、何も考えず、ただ自然の美魅そのままを映像と

して映しとどめ、恍惚そのものに化していた。

彼は七つの金魚池の青い歪ゆがみの型を、太古の巨きよじゆう獣じゆうの足跡のようを感じ、ぼんやりとその地上の美しい斑点に見とれていた。陽が映り込んで来て、彼の意識もはつきりして来ると、すぐ眼の前の古池が、今始めて見る古洞こどうのように認められて来た。それは彼の出来損じの名魚たちを、売ることも嫌い、逃しもならぬままに、十余年間捨て飼いに飼っておいた古池で、宗十郎夫婦の情で、ときどき餌を与えられていたのであったが、夫婦の死後は誰かえりみも顧るものもなく憐れな魚達は長く池の藻草や青みどろで生き続けていたのであった。この池の出来損じの異様な金魚を見ることは、失敗あつの痕あとを再び見るようなので、復一はほとんどこの古池に近寄

らなかつた。ときどきは鬱々うつうつとして生命を封付けられる恨みうらがましい生ものの気配けはいが、この半分古菰ふるこもを冠くすべつた池の方に立ち燻くすべるように感じたこともあるが、復一はそれを自分の神経衰弱から来る妄念もうねんのせいにしていた。

いま、暴風のために古菰がはぎ去られ差込む朝陽で、彼はまざまざとほとんど幾年ぶりかのその古池の面を見た。その途端、彼の心に何かの感動が起ろうとする前に、彼は池の面にきつと眼を据え、強い息を肺いっぱいはくしやに吸い込んだ。……見よ池は青みどろで濃い水の色。そのまん中に撩乱として白紗はくしやよりもより膜性の、幾十筋の皺がなよなよと纏もつれつ纏もつれつゆらめき出た。ゆらめき離れてはまた開く。大きさは両手の拇おやゆび指ゆびと人差指で大幅に一囲み

して形容する白牡丹ぼたんほどもあろうか。それが一つの金魚であつた。その白牡丹のような白紗の鱗には更にすみれ堇、ふじ丹、藤、薄青等の色斑があり、更に墨色古金色等の斑点も交つて万華鏡まんげきようのような絢爛、波瀾を重ちようじよう疊させつつ嬌艶に豪華ごうかにまた淑々として上品に内氣にあどけなくもゆらぎひろ拡がり拡がりゆらぎ、更にまたゆらぎひろ拡がり、どこか無限の遠方からその生を操られるような神秘的な動き方をするのであつた。復一の胸は張り膨らまつて、木の根、岩角にも肉体をこすりつけたいような、現実と非現実の間のよれよれの肉情のシヨックに堪え切れないほどになつた。

「これこそ自分が十余年間苦心さんたん慘さんたん愴して造ろうとして造り得なかつた理想の至魚だ。自分が出来損いとして捨てて顧みなかつた

金魚のなかのどれとどれとが、いつどう交媒して孵化して出来たか」

こう復一の意識は繰り返しながら、肉情はいよいよ超大な魅惑に圧倒され、吸い出され、放散され、やがて、ただ、しんと心の底まで浸^しみ徹^{とお}った一筋の充実感に身動きも出来なくなつた。

「意識して求める方向に求めるものを得ず、思い捨てて放擲した過去や思わぬ岐路^{きろ}から、突兀として与えられる人生の不思議さ」が、復一の心の底を閃めいて通つた時、一度沈みかけてまた水面に浮き出して来た美魚が、その房々とした尾鰭^{びら}をまた完全に展いて見せると星を宿したようなつぶらな眼も球のような口許も、はつきり復一に真向つた。

「ああ、真佐子にも、神魚華鬢之図にも似てない……それよりも……それよりも……もつと美しい金魚だ、金魚だ」

失望か、否、それ以上の喜びか、感極まった復一の体は池の畔の泥^{でいぬい}凪のなかにへたへたとへたばった。復一がいつまでもそのまま肩で息を吐き、眼を瞑っている前の水面に、今復一によつて見出された新星のような美魚は多くのはした金魚を^{したが}随えながら、悠揚と胸を張り、その豊麗な豪華な尾鰭を陽の光に輝かせながら撩乱として遊弋している。

(昭和十二年十月)

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 岡本かの子」筑摩書房

1992年（平成4）2月20日第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第三卷」冬樹社

1974（昭和49）年

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：大石純子

校正：門田裕志

2003年2月27日作成

2011年2月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金魚撩乱

岡本かの子

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>